

「アジアと子どもの本」

平成 16 年 7 月 3 日(土)

松居 直

ひとりの人間として、また日本人として、アジアに強い関心をもつようになった動機は、1945年 8 月 15 日の敗戦の体験からです。私は、敗戦のとき満 18 歳でした。突然に予想もしなかった全面降伏のニュースをラジオで聴き、戦争が終わったことを知ったのですが、まったく実感がわかずしらけた気持ちでした。ただ“死ななくてもよくなったのだ”ということは、なんとなく感じました。

男子は兵隊検査を受けて兵士となり、20 歳代で戦場で死ぬものと覚悟してきたのですが、戦争が終わったのだから、もう兵士として死ぬことはない、生きることができるらしいのです。ところが、その“生きる”ということの実感がもてません。この世に生を得て 18 年間、死ぬために生きてきたのですが、その目標が不意に消えてしまいました。死ななくてよいとは、生きられることです。生き続けるわけです。こうして“生きる”ということが、敗戦後の日々の生活の課題となりました。人として生きるとは？ 人は、何のために生きるのか？ どう生きればよいのか？ という大問題にぶつかりました。

この問題にかけがえのない指針を与えてくれたのが、敗戦直後に手に入れた『大トルストイ全集』(中央公論社刊 1936 - 39) 22 巻でした。トルストイならなにかの答えを与えてくれると、藁をも掴む気持ちで、まず『戦争と平和』から読みはじめ、『復活』、『アンナ・カレーニナ』、『幼年時代』と寸暇を惜しんで全集の大半を読みました。そして“生きるとは何か”、“人は如何に生きるべきか”の生と死の問題に、真正面から向きあう心と眼を授かりました。確信といえるようなものではなくとも、光がみえるように思ったのです。この読書体験から、それまでの読書とは異なった読書の意義に気づかされ、読書は、人が生きることに深く深く関わることなのだという意味を悟りました。

敗戦で学んだもうひとつのことは、自分がいかにものを知らず、世間知らずであったかということです。たしかに学校教育でたくさん大切な知識や技能を教えられたのですが、生きている現実を見究めるに必要な方法や知識は、ほとんど身につけていないことに気づかされました。その最初の衝撃は、アメリカ占領軍が進駐してきたときです。その圧倒的な物量と機動力に眼を見張り、こんな国と戦争をしていたのかと、おのれの無知さ加減を思い知らされました。そして 4 年間もアメリカと戦争をしていたのに、アメリカについての知識や理解があまりにも断片的で、乏しすぎる自分を知り、無知を恥ずかしいと思いました。学校教育に、強く疑問を感じたのはこのときです。

敗戦の翌 1946 年に大学に入り、さらに冷静に考えてみると、1931 年に私が満 5 歳のとき勃発した満洲事変以来、15 年間も中国と戦争を繰り返していながら、現代中国の政治や社会、それを支えている思想や文化などについて、これまた貧弱きわまりない知識しかもちあわせていません。中国に対して全く無知な多くの日本人が武器を手にして、戦闘や占領や統治をしていた日中戦争の実態は、想像に余りあります。今になっては教えられなかったことを嘆くのではなく、自分で学ぶしかないと心に決めました。

朝鮮半島に対する 36 年間の植民地支配についても、改めて関心を持ち、朝鮮史の本を極力読みました。それ以外のアジア各国、各地域のことは資料もなく手に負える問題ではありませんが、日本軍が武力で介入していた東南アジア地域での戦争の正体をどううけとめ、世界の人々が願う平和や相互理解になにができるのかも、生きることのなかでしっかりと受けとめようと思いました。私がアジアにとりわけ強い関心を持ち心を寄せるようになったのは、こうした体験と動機とによってです。

やがて出版界に入り、子どもの本の編集者となったとき、先の経験から、近隣の諸国や諸民族へのまなざしをしっかりともち、異文化への柔軟な感性と発想とを養えるような子どもの本、とくに絵本を出版しようと志すようになりました。それが至難の業だと気づいていても、戦争と敗戦という体験を経た人間がしなければならぬ仕事だと思い決めました。1950 年に勃発した朝鮮戦争は、わが国に政治・経済の面で多大の影響をもたらし、韓国・朝鮮人への関心が強くなりました。1956 年に創刊した月刊物語絵本「こどものとも」に全力を投入していた私は、朝鮮半島の昔話を絵本にすることが緊急の課題だと考えました。

昔話はすべての物語のルーツですし、各民族の伝統や文化に深く根づいています。その共通点や異質な面に、子どもころ触れておくことが、将来の国際理解や交流には大切な経験となるはずです。これに気づいて、手はじめに朝鮮の昔話集から絵本に適した物語を選び、絵本の挿絵の描ける画家を探し求めたのですが、朝鮮半島の自然や文化や人々のくらしを描ける日本人の画家は皆無でした。関心を示す人もいません。36 年間の植民地支配からなにかを学びとったのは、柳宗悦のほかには誰もいなかったのです。そこで韓国の編集者や大韓出版文化協会のご協力をえて、1973 年にソウルを訪問し、これだと思う画家に会ったのですが、当時としては絵本には全く関心を示されません。ようやく在日の作家と画家の理解をえて、1974 年『トケビにかったバウイ』という絵本の編集に漕ぎつけました。

新中国の出版事情についても情報や資料が乏しく、どう手をつけてよいか見当もつきません。訪中する知人に頼んで、ようやくパンフレットのような絵本を入手し、物語の原作者と交渉して正式の出版契約を交わして、なんとか日本人の画家の手で絵本に仕上げました。中国の昔話の絵本化は、旧満州に十数年居住し、皮影戯（ピーインシ（影絵芝居））などの民衆文化に深い関心をもっていた画家の赤羽末吉氏に出会って、『スーホの白い馬』他の絵本を出版することができました。

この間、1967年に日本ユネスコ国内委員会主催、日本書籍出版協会後援で、第一回「出版技術研修コース」が開催され、アジア地域の14ヵ国18名の研修者化が参加しました。計らずも私が子どもの本編集についての講師に指名され、各国の指導的な立場のすぐれた専門家の方々と近づきになることができ、一挙にアジアをみる視野が開かれました。そして1969年にはユネスコ東京出版センター(TBDC)が創設され、それが発展して1971年にはユネスコ・アジア文化センター(ACCU)が設立され、アジア共通読物開発事業として子どもの本の共同出版計画(ACP)がはじまり、そのテスト版として『ちのはなし』14ヵ国語版、『たろうのともだち』12ヵ国語版の編集と製作の出版実務を、私が担当することとなりました。この仕事と年ごとの出版技術研修コースをとおして、アジアの参加各国の言語、文字、生活文化、民族と宗教の問題、そして出版事情への理解を深めることができ、ようやく“アジアにおける子どもの本”という視点に立つ手がかりをつかむことができるようになりました。

1971年にはACCUの要請で、アジア各国の子どもの本の出版事情と、文字文化やタイプフェースのデザインなどの視察のために、杉浦康平氏と私とがインド、タイ、ラオス、インドネシア、シンガポールへ派遣されました。はじめて実地に体験する、インド各地や東南アジア各国における生活文化や伝統文化の無限の多様さとゆたかさには、圧倒されるばかりでした。このときにアジアなどとひとくくりで発想すること自体が、アジアを見失うことだと思ひしりました。

アジアを視野に収めるには、それぞれの国を詳細に考察し、各民族とその言語と文字、また教育の実態や課題を把握しなければ、その国の実情に応じた子どもの本の出版など考えられません。また出版に関しては、資本、組織、人材、著作者が不可欠ですし、読者と識字や学校制度の問題も無視できません。編集や印刷、製本と用紙の確保をどうするか、さらに流通と販売の問題もあります。一万以上の島があるインドネシアでは、教科書の流通と配布をどうすればよいのかという問題がでます。フィリピンは、七千以上の島があり、言語が複雑なのだから、本をつくる以前に言語問題と識字問題が最大の課題となります。

こうしたことを勘案すると、アジアでは国ごとにきめ細かく交流し、まず実情を把握、分析し、理解を共有して対応を考えてゆかなければならないことがわかります。経済や国際情勢が激しく変化する現代では、その困難さは想像を絶します。だからこそ遠い将来を見越して、無知を克服し、知ることの喜びを養い、異文化理解への手がかりとなる子どもの本の出版が求められます。国際子ども図書館には、カナダの多文化主義にもとづいて出版された、多様な約400冊の絵本が収集されていますが、こうした貴重な資料を参考にして、今後私たちがなにをなすべきか、すなわちどう生きるべきかを真剣に考えねばなりません。

(福音館書店相談役 まつい ただし)